

八重山先史時代における海産資源重視論の再考 小林 竜太 (慶應義塾大学大学院 文学研究科)

1. はじめに

八重山諸島は、フィリピン海プレートがユーラシアプレートに潜り込む琉球海溝の西側にならぶ琉球列島の南部を構成する。プレートテクトニクスにともなう隆起運動や火山活動、間氷期の海水量増大にともなって生じるハイドロアイソスタシーによって形成された島々で、火成岩、堆積岩、変成岩からなる多様な地質構造をもつ (河名 2002)。山地・河川を有する石垣島、西表島、小浜島、サンゴ礁起源で琉球石灰岩に被われた竹富島、黒島、新城島、鳩間島、波照間島に大別される (目崎 1980, 木崎 1985)。それぞれ「高島」、「低島」と呼び分けられ (目崎 1980)、両タイプの島々が約50km圏内に近接して分布する (図1)。八重山諸島の先史考古編年は、波照間島下田原貝塚出土土器を示準とする下田原期と土器が出土しない無土器期に大別される (金武 1994, 金武ほか 2007)。信頼性の高い遺跡出土試料の放射性炭素年代測定値 (以下、すべて測定炭素年) から、下田原期は B.P.4230±50 年 ~ 3630±80 年、無土器期は B.P.1540±40 年 ~ 1370±75 年、B.P.1320±135年の範囲に収まる (e.g. 名島ほか 2008) (図2)。

出土遺物の編年研究 (e.g. 金武ほか2007、安斎 2007a) と放射性炭素年代測定によつ

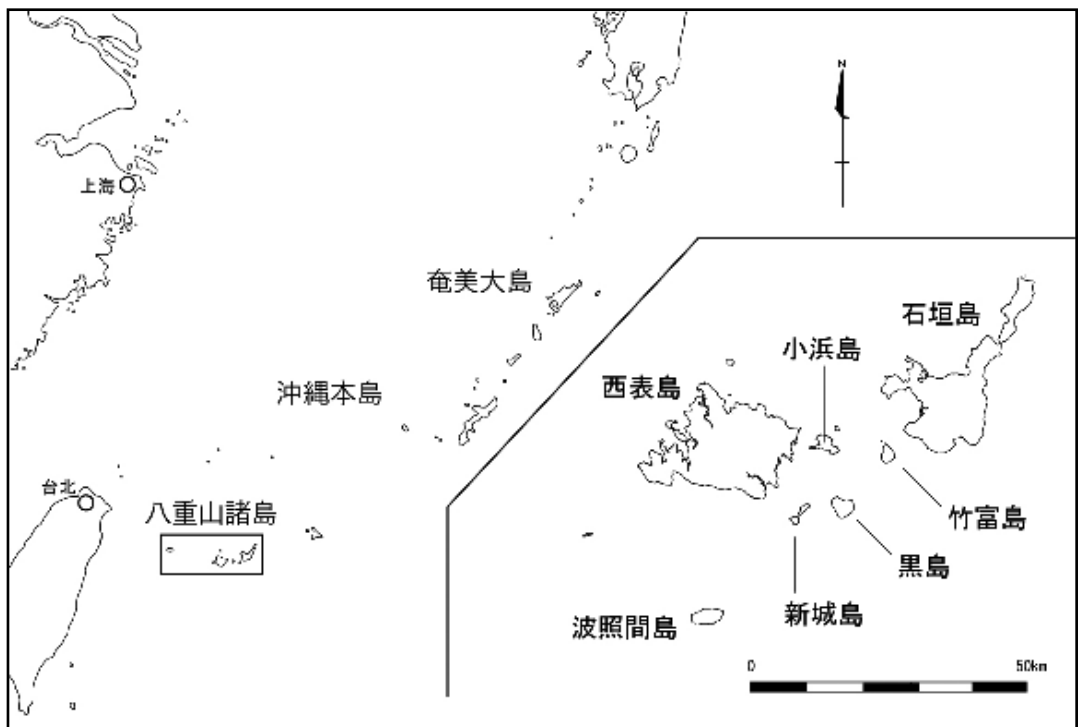


図1 八重山諸島の位置

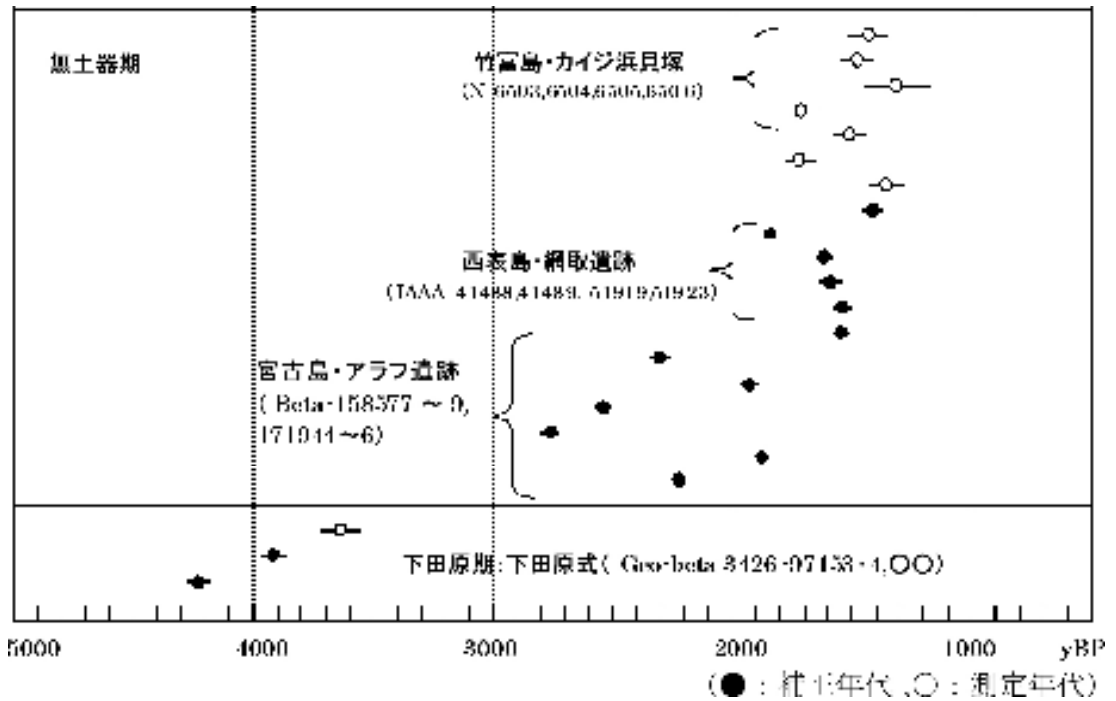


図2 先島諸島先史時代遺跡放射性炭素年代測定 (名島ほか2008、一部改変)

て、下田原期が古く無土器期が新しいとする先史時代の2時期区分は定説として広く受け入れられているが¹、両時期の生業活動の解明はようやく端緒についたところである。植物利用としては、アワ (佐々木 1973、国分 1972)、ヤマノイモ (Peason 1969)、根栽類 (佐々木 1973) の栽培が想定されてきた。こうした先史農耕の主張は、八重山先史時代相当期にすでに農耕をおこなっていた台湾やオセアニア島嶼世界との文化史的繋がりを想定する研究者に認められる (e.g. Summerhayes et al 2009)。しかし、今のところこれらを実証する資料は検出されていない (e.g. 宇田津 2005)。八重山地域の先史農耕の問題を解明するためには、台湾やオセアニアとの文化史的関係について考古資料をもとに検討しつつ、今後増加が期待される植物遺体や微化石の分析を進めなければならないが、いずれにしても本地域における先史生業活動の研究はこれまで狩猟採集を想定して進められてきている。

狩猟採集を生業の基本と想定する先行研究では、海産資源利用を重視する傾向にある。特に無土器期の生業戦略は活発な海産資源利用が特徴として指摘されることが多い。本研究ではその論拠を整理し、今後の研究の進むべき方向性を確認する。

¹ ただし、高宮廣衛氏はさらなる細分の可能性を提示しており、無土器期の初限に貝斧を主体とする文化 (名蔵貝塚文化) の存在を想定する。(高宮 1998)。

2. 考古学の先行研究における海産資源利用重視論の展開

2-1. 先史遺跡立地と好適漁場としてのサンゴ礁

滝口宏を団長とする早稲田大学八重山学術調査団は、波照間島下田原貝塚、西表島仲間第一貝塚・第二貝塚・平西貝塚、石垣島山原貝塚、黒島などで調査をおこない、これらの調査成果から考古班の西村正衛は遺跡立地を次のようにまとめた。「今回調査したのは、前述のごとく貝塚であった。それらはいずれも、海岸や河口に近く、しかも、サンゴ礁の発達した海岸に臨んだものが多い。食物採集の段階にあった時期はもとより、その生産の段階に達していても、島のまわりに発達したサンゴ礁の浅瀬に、好んで集まってくる魚介類に対して漁撈をおこない、生活の主要な糧とするばかりでなく、貝類などを加工したりして、特産品として交易の役に立てしめたであろう」（西村 1960: 155）。西村は先史～歴（原）史時代にかけて河口付近の海岸線、特に発達したサンゴ礁域をのぞむ空間が生業活動に利用され続けたと考え、その理由としてサンゴ礁域での漁撈活動を想定した。同様の指摘はその後の研究にも認められる。大城慧氏は石垣市教育委員会による大田原遺跡の発掘調査報告書において、歴（原）史時代における内陸部への遺跡の分布を指摘した上で、サンゴ礁の発達する海域を本地域で生活するために必要な環境の一つとして評価する（大城 1982: 1）。また陳有貝氏は、台湾先史時代と先島先史時代の比較分析から、先島の海域環境について「広大な珊瑚礁からなっている」ことや遺跡立地について「多くは海岸台地や砂丘に集中し、内陸部は少ない」ことを特徴としてあげた上で、サンゴ礁域で「魚介類資源の採集や捕獲作業」が盛んに行われたと指摘する（陳 2004: 33）。

しかし、サンゴ礁域での漁撈を生計戦略上重要な生業とする上記の評価は、遺跡出土動物遺体の分析結果を反映したものではない。早稲田大調査による動物遺体の概報では、まず貝類遺体について先史遺跡の仲間第一貝塚でシレナシジミなどの淡水貝が多く、歴（原）史期の山原貝塚ではコオニコブシ・ガンゼキボラ・ヒメシヤコが多い。次に魚類遺体は先史遺跡で少なく、歴（原）史遺跡で多い。最後に陸獣類は先史遺跡でリュウキュウイノシシが多量に検出され、歴（原）史期ではごく少量である。こうした動物遺体の記載からは、地域差が示唆されている（西村 1960: 156）。したがってサンゴ礁資源の積極的な評価は、本地域を特徴づける「南国独特」（滝口 1960: 2）の沿岸環境が利用されたはずであるという想定に基づいた見解と判断してよい。陳氏の指摘も台湾島と比べて、先島諸島の「広大な珊瑚礁」がイメージされた結果と推測できる。「発達したサンゴ礁」、「広大な珊瑚礁」の利用については、遺跡出土動物遺体の個別具体的な分析によって検証されなければならない。

2-2. 無土器期におけるサンゴ礁・海産資源適応説

1960年以降、緊急発掘調査の増加、現地の研究者による精力的な踏査（e.g. 大濱 1999）、行政による八重山全域の詳細分布調査（当真・大城 1979、岸本 1980）が進み、先史遺跡の確認例が急増した。そのうち、石垣島大田原遺跡・神田貝塚の発掘調査（金武

1980) と波照間島下田原遺跡・大泊浜貝塚の発掘調査(金武・金城 1986)、また諸研究者の研究史の精査・検討を経て、早稲田編年の層位学的逆転が明らかとなった。この先史編年の修正にともなって、下田原期と無土器期の文化史的連続性の有無が関心を集め、両時期の差異と共通性が議論されるようになる。遺跡立地についても、下田原期は海岸付近の微高地、無土器期は海岸付近の砂地に遺跡が形成される傾向にあることが、複数島嶼の遺跡立地から指摘された(e.g. 大濱 1999、石垣市総務部市史編集課 2008, 2009)。

両時期の遺跡立地の差異について、新田重清氏は名蔵貝塚群の発掘調査(新田 1979)から料理に使用されたと考えられる焼石や貝類遺体を主体とする自然遺物が多量に出土した点に注目し、無土器期の「生業を推論するとすれば、漁撈に傾斜した生活基盤に特徴がみられ、・・・(中略)・・・遺跡立地や海への適応が積極化する点においては、沖縄の後期砂丘遺跡に類似する」(新田 1980: 287)と指摘した。上原静氏も「無土器遺跡は砂丘に立地し、その生活内容が漁撈に傾斜したところは、沖縄貝塚時代に類似するものであり、類似した環境と生活形態から選択されたものだと考える」(上原 1988: 140)と、同様の見解を提示する²。また安斎英介氏は西表島西部の無土器期貝塚の立地から、「この時期の遺跡においては農耕の証拠がなく、貝塚の形成などからは活発な海産資源利用を行う狩猟採集を基本とした生業活動が想定できる」(安斎 2007b: 208)と評価する。つまり上記論考では、貝塚の形成と海岸砂丘への遺跡立地という無土器期の特徴を海産資源の活発な利用の反映と捉え、下田原期に比べてより海産資源に適応した生業戦略を想定している。

両時期の系統関係については、有土器から無土器への系統的変遷を是認する「文化一元論」、土器を有する系統と土器を持たない系統の文化的置換が生じたとする「文化二元論」にまとめられる(大濱 1985、安斎 2007a)³。このうち、下田原期と無土器期が同系統の文化と考える一元論の立場から、無土器期におけるサンゴ礁域への適応強化を想定する論考もある。たとえば安里嗣淳氏は下田原期を前期、無土器期を後期とし、石垣島名蔵貝塚群と宮古島浦底貝塚の規模から「珊瑚礁の海(ラグーン)などから得られる食料資源の豊富さに支えられて、人口の増加があった」(安里 1993: 66)ことを想定し、「前期の系統の集団が、ある時期に土器の製作使用をしなくなり、石蒸し調理を日常化するとともに、貝斧文化をとり入れ、珊瑚礁海域への適応をいっそう強めていった」(ibid.: 80)と想定している。安里氏は規模の大きい名蔵・浦底両貝塚形成の背景としてサンゴ礁産の

² 新田・上原両氏が無土器期との類似を指摘する沖縄本島の貝塚時代後期は、一般に漁撈が活発化する時期と理解されているが(e.g. 友寄1970、伊波 1982、安里 1988)、樋泉岳二氏によれば脊椎動物遺体群の組成にこれに対応する変化は認められないという。樋泉氏は、遺跡立地変化は魚や獣類の利用とは関連の薄い別の要因によって生じた現象であることを示唆しており、最も考えやすい要因としてゴホウラ・イモガイなどの交易用貝類に対する需要の増大を想定する(樋泉 2002: 59)。

³ また、「文化一元論」には無土器時代は存在せず、有土器遺跡と無土器遺跡は生業戦略上補完関係にあったとする説(e.g. 国分 1981、三島 1982)、「文化二元論」には土器を生産する集団と土器を生産しない集団が共存したとする説(pearson 1969)が提示されてきたが、近年の研究の研究状況では可能性の低い論説となりつつある。編年研究史の整理については安斎(2007b)氏の論考に詳しい。

資源に依拠した食料獲得戦略を想定し、またシャコガイというサンゴ礁域に産する資源によって作成される貝斧の盛行をサンゴ礁域への適応の反映であると評価する。

無土器期における「サンゴ礁・海産資源への適応」は立地の変化と貝塚規模の拡大によって想定されている。海岸付近の微高地から海岸付近の砂地への立地の変化が海域へのさらなる近接と捉えられ、サンゴ礁・海産資源利用に比重をおいた生業戦略が貝塚規模の拡大につながったと考えられたのである。しかしながら、無土器期の特徴を「サンゴ礁・海産資源への適応」の結果と評価するための十分な根拠が提示されているとは言い難い。立地の変化については遺跡と当該期の海域環境の評価が遺跡ごとに検討される必要があり、貝塚規模の拡大については前節での指摘と同様に遺跡出土動物遺体の個別具体的な分析によって検証されなければならない。

2-3. サンゴ礁発達史の引用

近年、サンゴ礁資源利用の活発化にサンゴ礁環境そのものの時期的変化を要因にあげる研究が出はじめている。木下尚子氏による沖縄貝塚時代後期の研究であり、「沖縄諸島の後期遺跡の多くは、眼前にサンゴ礁海域を控え、貝塚はその産物で満ちている」（木下2000: 107）と指摘した上で、消波構造を伴う礁嶺の形成によって、「サンゴ礁の海岸環境が、後期初頭に、人間生活に好適な条件を完備するに至った」（*ibid.*: 111）と仮定し、台地や内陸から海岸線の砂丘へと生活の場が移ったと想定した。八重山諸島においては安斎英介氏の研究がある。安斎氏は前述の安里氏の論考を参照し、宮古島における消波構造を伴う礁嶺形成の時期が無土器期の遺跡出土放射性炭素年代測定値の上限とほぼ重なることを指摘し、「この時期に積極化する海浜への遺跡の展開とその眼前に広がる海へ適応した生活の形態の一環としてシャコガイ製貝斧が製作されるようになったという解釈が可能ではないだろうか。この時期の遺跡で活発に形成される貝塚は、当該期の食料として海洋資源利用の活発化を物語っている。」（安斎 2008: 90）と述べており、シャコガイ製貝斧登場の背景としてサンゴ礁の分帯構造の形成を念頭においている。金武正紀氏らは八重山諸島のサンゴ礁発達にかかわる研究史を引用し、波照間島下田原遺跡と大泊浜貝塚の発掘調査報告書からそれぞれの遺跡出土の上位10種の貝類を集計（個数MNI）した上で、両遺跡の貝類組成について、「下田原貝塚ではチョウセンサザエやハナマルユキ、ムラサキイガレイシ、ヤコウガイといった干瀬（礁嶺）に特徴的に生息する種が多いのに対し、大泊浜貝塚ではこれらの割合が減少し、オニツノガイやシャゴウなど、イノー（礁池）に生息する種の割合が増加」（金武ほか 2009: 52）することを指摘し、「無土器期には下田原期よりもイノーが発達し、そこでの貝類採取が活発になった」（*ibid.*: 52）可能性を示唆する。

下田原期と無土器期それぞれの時期において利用可能な沿岸環境に差異を想定する指摘は、先史時代の生業活動を考える上で極めて重要である。しかしながら、安斎氏の研究では、サンゴ礁地形発達史や動物遺体分析の具体的研究がないままに、「海洋資源利用の活

発化」の想定が概説として提示されている。金武氏らの分析は、サンゴ礁発達と貝類採取の関係を貝類遺体の定量的分析から示しているが、サンゴ礁のローカルな地形発達史にかかわる地球科学的証拠、あるいは評価がなされているわけではない。

3. 八重山諸島における海産資源利用重視論の再考

八重山先史時代の考古学的論考では、海岸線付近に遺跡が集中するという立地傾向が、先史島嶼民の生業活動に漁撈が重要な役割を担っていたためと解釈され、本地域の海域環境を特徴付ける発達したサンゴ礁の存在がその背景として想定される傾向にあった。そして下田原期と無土器期間に認められる遺跡立地の差異、すなわち海岸付近の微高地から砂地への変化は貝塚規模の拡大と合わさって、海産資源利用の活発化・積極化と評価されてきた。

近年、無土器期におけるサンゴ礁環境への適応といった想定に関連して、琉球列島におけるサンゴ礁形成史研究が援用され始めているが、基本的には前段の研究史の流れを汲む論考といえる。しかしながら、こうした先史時代の生業戦略に対する想定は、遺跡出土動物遺体の個別具体的な分析や個々の遺跡の立地にかかわる沿岸環境変化の研究にもとづく議論ではない。八重山先史時代の生業戦略は、本地域の地理的沿岸環境の概説的イメージである「発達したサンゴ礁」、無土器期の要素の定性的評価、沖縄貝塚時代後期との安易な比較によって想定されてきたと考えられる。

したがって、今後八重山先史時代における生業活動を議論していく上でまずは、本地域において活発に利用されたと指摘されるサンゴ礁域と遺跡立地の空間分布に焦点をあて、サンゴ礁地形発達史にかかわる地球科学的研究と協働していくことが重要である。その上で、遺跡出土動物遺体の組成にもとづく定量分析から生業活動を評価する必要がある。本稿では最後に、琉球列島のサンゴ礁地形発達史にかかわる地球科学の成果を紹介し、次に波照間島と石垣島の先史遺跡の動物遺体から八重山先史時代の生業について予察を提示しておきたい。

3-1. サンゴ礁発達の地域差と遺跡分布-石垣島先史時代の例-

新学術領域研究「サンゴ礁学」⁴の一環として、筆者は石垣島の先史遺跡とサンゴ礁資源利用の通時的関係について分析を進めている。琉球列島の考古学の先行研究によって漁撈の場として想定されるサンゴ礁は後氷期の海面上昇とその後の安定にともなって形成された地形で、予め島に用意された所与の環境ではないからである。琉球列島のサンゴ礁に現海面より50m以深で顕著なサンゴ礁地形は認められず（堀・茅根 2000）、現在見られる琉球列島のサンゴ礁はすべて完新世後期の海面上昇にともなって形成されたと想定され

⁴ 筆者は文部科学省新学術領域研究「サンゴ礁学-複合ストレス下の生態系と人との共生・共存未来戦略」（研究代表者：茅根創）の計画研究B02班「サンゴ礁-人間共生系の景観史」（代表者：山口徹）において研究を進めている。

ている(茅根ほか 2004)。ただし近年の研究は、サンゴ礁発達は同一島内にさえ地域差があることを明らかにしている。たとえば八重山諸島石垣島では、サンゴ礁地形のなかで最初に形成される礁嶺部の放射性炭素年代値に場所によってB.P.4600±80年～B.P.2290±70年の時期差が報告されている(Hongo et al 2008)。これは、下田原期と無土器期において島嶼民が利用しえたサンゴ礁域の空間分布に地域差があったことを示してい

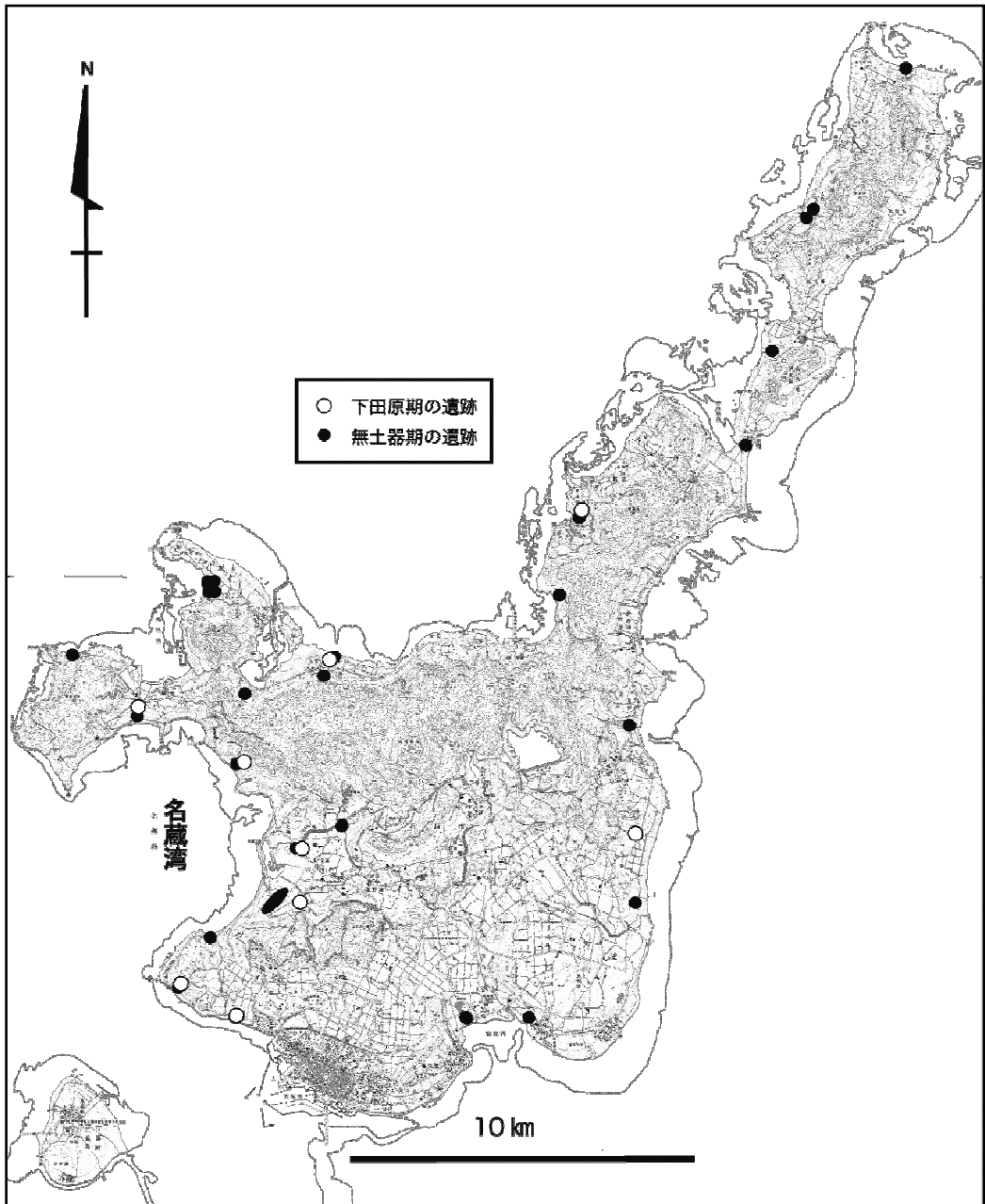


図3 石垣島の先史遺跡分布

(数値地図1/50000、当真・大城 1979、大濱 1999、石垣市教育委員会 2000より作成)

る。石垣島のサンゴ礁環境を概観すると、太平洋に面する東海岸や中央北部の川平周辺は分帯構造の明瞭なサンゴ礁が分布するが、北東部の東シナ海側のサンゴ礁では分帯構造が不明瞭であり、西側に大きく湾口を開く名蔵湾内では礁嶺が認められない(目崎 1991、長谷川・山野 2004)。考古学から特に興味深い点は、サンゴ礁が未発達⁵であるにもかかわらず、名蔵湾沿岸に下田原期と無土器期の遺跡が分布することである(図3)。

3-2. 波照間島と石垣島の先史遺跡出土動物遺体の分析

先史時代において定量的分析にたえうる資料は多くない。そのなかで波照間島北海岸に位置する下田原遺跡(下田原期)と大泊浜貝塚(無土器期)、石垣島名蔵湾沿岸に位置する大田原遺跡(下田原期)と神田貝塚(無土器期)は、動物遺体の報告が利用できる⁶。したがって、4遺跡遺物包含層出土の脊椎動物遺体比(%NISP)と貝類遺体の生息域別組成比(%MNI)を比較することは可能である⁷。図4は各遺跡における脊椎動物遺体比を%NISPで示したものである。まず4遺跡で共通して指摘できる点は、陸域資源であるリュウキュウイノシシが組成の60%以上を占めており、魚類については主にサンゴ礁産の魚種で占められる硬骨魚類の出土が大田原遺跡で約30%を数える以外5%に満たないことである。また、下田原期と無土器期を隣接する2遺跡ごとに比較すると、大田原遺跡に比べ神田貝塚でリュウキュウイノシシの割合が増加し、下田原遺跡と大泊浜貝塚ではいずれも組成に大きな変化は確認されない。

図5は各遺跡における貝類遺体組成比(%MNI)を生息域別に示したものである。まず下田原遺跡と大泊浜貝塚はサンゴ礁域に産する貝類が約90%を占め、残りをマングローブ干潟の貝類が占める。一方、大田原貝塚と神田貝塚はマングローブ域・河口干潟域・内湾岩礁/砂底域に産する種が95%以上を占める。時期的変化をみると、波照間島の2遺跡では下田原遺跡に比べて大泊浜貝塚がサンゴ礁の礁池砂底域に産する貝類が増加する。一方、石垣島の2遺跡は大田原貝塚に比べて神田貝塚で河口干潟の貝類が増加することが確認される。

いずれの遺跡においても陸海域あわせた脊椎動物遺体の中でリュウキュウイノシシが卓越し、海産資源を示す魚骨の出土は概して少ない。海産資源利用の「積極化」「活発化」が想定されている無土器期においてもリュウキュウイノシシの出土が卓越する傾向は変わらない。もちろん、陸獣のリュウキュウイノシシの遺存体と魚骨の破片数を単純に比較することはできないが、少なくとも下田原期と無土器期のいずれにおいても陸域資源がかな

⁵ 現在の名蔵湾内には礁嶺は認められない。一般に礁嶺は最初に形成される礁地形であることから、名蔵湾内は過去においても礁嶺は形成されていなかった海域と推測される。

⁶ ただし、大田原遺跡と神田貝塚は1,3mmの乾燥フルイを用いて遺物を採取していると記載されているが、下田原遺跡と大泊浜貝塚には報告書中に採取方法についての記載がない

⁷ 貝類遺体の生息域分類については、琉球列島の貝類遺体分析において広く用いられている黒住耐二氏による分類案(黒住1987)を利用する。

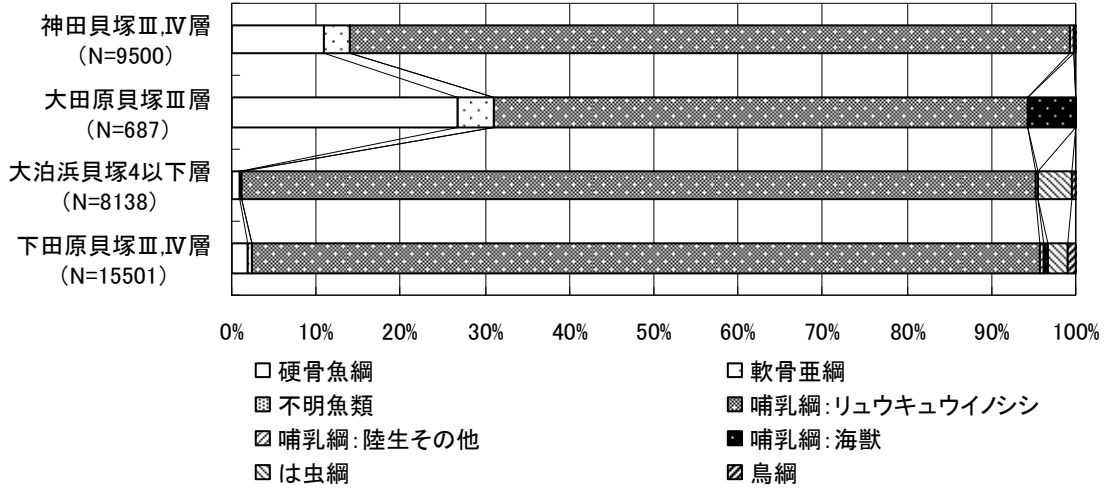


図4 八重山諸島先史時代遺跡出土脊椎動物遺体比 (%NISP)

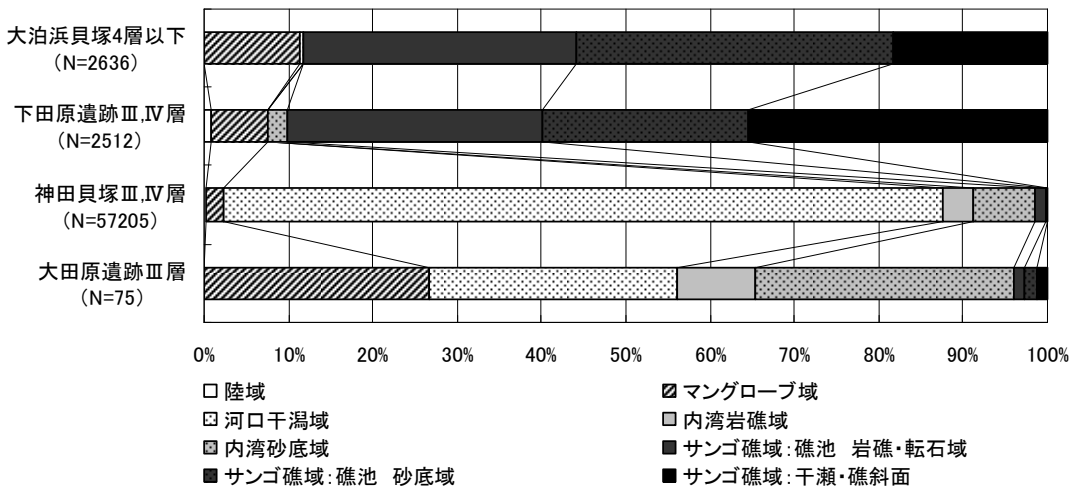


図5 八重山諸島先史時代遺跡出土貝類遺体組成比 (%MNI)

り利用されていたことはまちがいない。貝類遺体の分析からは、波照間島の2遺跡ではサング礁産の貝類が卓越する。一方で、石垣島の2遺跡ではいずれもサング礁産の貝類は極めて少ないことが指摘できる。少なくともここであげた4遺跡の貝類資源利用は、時期的な差異よりもローカルな沿岸環境に由来するものであったことを示唆する。

八重山先史時代の生業活動は海産・陸産問わず多様な資源を組み合わせる戦略に支えられていたと評価できる。現在の石垣島名蔵では、礁嶺は未発達ながらハマサングの群体が水深数m付近に点在し、さらに浅海には藻場が広がる。また名蔵川河口域にはマ

ングローブ湿地があり、標高5-10mのなだらかな中位段丘下位面がその後背に続く。石垣島の中でも生態学的には多様な環境を内包する地域・海域である。完新世の相対的海面変動と地形変化を詳細に検討する必要があるが、おそらくは下田原期、無土器期いずれにおいても生態学的移行帯 (ecotone) に遺跡が立地していた可能性が高い。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、指導教員の山口徹先生（慶應義塾大学）にはご指導ご鞭撻を賜った。この場を借りて深く御礼申し上げます。

【参考文献】

Glenn, R. Summerhayes and Atholl Anderson

2009 An Austronesian presence in Southern Japan: early occupation in the Yaeyama Islands. *Ippa Bulletin* . 29:76-91

Hongo, C., H. Kayanne

2008 Holocene coral reef development under windward and leeward locations st Ishigaki Island, Ryukyu Islands, Japan. *Sedimentary Geology*. 214:62-73

Pearson, R.

1969 *The Sequence in the Sakishima Island Archaeology of The Ryukyu Island*. UNIVERSITY OF HAWAII PRESS

安里嗣淳

1993 「南琉球の原始世界—シャコガイ製貝斧とフィリピン—」比嘉政夫（編）『海洋文化論 環中国海の民俗と文化1』pp.61-84, 凱風社

安里進

1988 「琉球—沖縄の考古学的時代区分をめぐる諸問題（下）」『考古学研究』34:4:50-67, 考古学研究会

安斎英介

2007a 「先島諸島の先史文化と考古学編年に関する研究略史」『廣友会誌』3:17-36, 廣友会

2007b 「西表島西部の村落と環境からみた網取遺跡」東海大学考古学第一研究室（編）『網取遺跡・カトゥラ貝塚の研究 沖縄県西表島所在の先史時代貝塚・近世集落遺跡の発掘調査』pp.205-217

2008 「貝製利器からみた先島諸島の先史文化の展開」『地域文化論叢』10:63-94, 沖縄国際大学地域文化研究科

石垣市教育委員会（編）

2000 『石垣島の岩陰遺跡—沖縄県石垣市内岩陰遺跡分布調査報告書—』石垣市文化財調査報告書26, 石垣市教育委員会

石垣市総務部市史編集課

2008 『石垣市史ビジュアル版2 下田原期のくらしー八重山諸島最古の土器文化ー』

2009 『石垣市史考古ビジュアル版3 有土器から無土器へー先島諸島先史時代無土器期のくらしー』

伊波寿賀子

1982 「沖縄本島先史貝塚から見た漁撈活動について」『物質文化』38:1-13, 物質文化研究会

上原静

1988 「南西諸島」『月刊 考古学ジャーナル』291:134-141, ニュー・サイエンス社

宇津田徹朗

2005 「石垣島における稲作の起源を追ってープラント・オパール分析法を用いた検討ー」『石垣市史のひろば』28:24-34, 石垣市総務部市史編集課

大城慧 (編)

1982 『大田原遺跡』石垣市文化財調査報告書4, 石垣市教育委員会

大濱永亘

1985 「八重山の先史時代を考える」『石垣市のひろば』8:6-13, 石垣市役所市史編集室

1999 『八重山の考古学』, 先島文化研究所

茅根創・本郷宙軌・山野博哉

2004 「サンゴ礁の分布」環境省・日本サンゴ礁学会 (編)『日本のサンゴ礁』pp.15-21

河名俊男

2002 「琉球弧のネオテクトニクス」木村政昭 (編)『琉球弧の成立と生物の渡来』pp.59-83, 沖縄タイムス社

木崎甲子郎 (編)

1985 『琉球弧の地質誌』, 沖縄タイムス社

岸本義彦 (編)

1980 『竹富島・与那国町の遺跡ー詳細分布調査報告書ー』沖縄県文化財調査報告書29, 沖縄県教育委員会

木下尚子

2000 「琉球列島の人びとの暮らしと倭人」国立歴史民俗博物館 (編)『2000年前の多様な暮らし』pp.103-127, 山川出版社

金武正紀

1994 「土器→無土器→土器ー八重山考古学編年試案ー」『南島考古』14:83-92, 沖縄考古学会

金武正紀 (編)

1980 『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告 大田原遺跡 神田貝塚 ヤマバレ遺跡』沖縄県文化財調査報告書30, 沖縄県教育委員会

金武正紀・金城亀信 (編)

1986 『下田原貝塚・大泊浜貝塚―第1・2・3次発掘調査報告―』沖縄県文化財調査報告書74, 沖縄県教育委員会

金武正紀・島袋綾野

2007 「八重山考古学研究略史」『石垣市考古ビジュアル版1 研究史―八重山考古学のあゆみ―』 pp37-60, 石垣市総務部市史編集課

金武正紀・島袋綾野・河名俊男

2009 「食料」『石垣市史考古ビジュアル版3有土器から無土器へ―先島諸島先史時代無土器期のくらし―』 pp49-52, 石垣市総務部市史編集課

黒住耐二

1987 「遺跡出土貝類の生息場所類型化の試み」『石川市「古我地原貝塚」-オキナワ自動車道(石川～那覇間)建設に伴う緊急発掘調査報告書(6)-』沖縄県文化財調査報告書84:359-362, 沖縄県教育委員会

国分直一

1972 『南島先史時代の研究』考古民俗叢書10, 慶友社

1981 「台湾と琉球をめぐる問題―馬淵東一教授書信と新田重清氏論考所見―」『えとのす』14:21-23, 新日本教育図書

佐々木高明

1973 「南島根栽農耕文化の流れ」佐々木高明・国分直一(編)『南島の古代文化』 pp51-88, 毎日新聞社

高宮廣衛

1998 「南島先史時代研究の現状」『日本考古学協会1998年度大会資料集』 pp1-8, 日本考古学協会

滝口宏

1960 「南西諸島を訪ねて」滝口宏(編)『沖縄 八重山』 pp1-8, 高倉書房

陳有貝

2004 「生業の視点で捉えた台湾と先島諸島との先史文化関係(森威史訳)」『南島考古』 23:31-42, 沖縄考古学会

樋泉岳二

2002 「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」『先史琉球の生業と交易―奄美・沖縄の発掘調査から―』 pp.47-66, 熊本大学木下研究室

当真嗣一・大城慧 (編)

1979 『石垣島の遺跡―詳細分布調査報告書―』沖縄県文化財調査報告書22, 沖縄県教育委員会

友寄英一郎

1970 「沖縄出土の弥生式土器 付・琉球関係考古学文献目録補遺(四)」『琉球大学 法

文学部紀要社会篇』14:47-59, 琉球大学法文学部

名島弥生・安斎英介・宮城弘樹

2008 「南西諸島の炭素14年代資料の集成」『南島考古』27: 23-48, 沖縄考古学会

西村正衛

1960 「総合的所見」滝口宏(編)『沖縄 八重山』pp155-164, 高倉書房

新田重清

1979 「11.名蔵貝塚群」『石垣島の遺跡—詳細分布調査報告書—』沖縄県文化財調査報告書22, 沖縄県教育委員会

1980 「八重山諸島の考古学界に関する最近の動向について」『第四紀研究』18(4) :281-293, 第四紀学会

目崎茂和

1980 「琉球列島における島の地形的分類とその帯状分布」『琉球列島の地質学的研究』5 :91-101, 琉球大学

1991 『石垣島のサンゴ礁環境』(財)世界自然保護基金日本委員会

長谷川均・山野博哉

2004 「a.石垣島」『日本のサンゴ礁』環境省・日本サンゴ礁学会(編), pp.220-226

堀和明・茅根創

2000 『琉球列島中・南部の島棚地形の特徴とその形成過程について』『地理学評論』73A(3):pp.161-181, 日本地理学会